

東海道四谷怪談裏話

大塚喜子

文政八年三月、七十歳になる鶴屋南北は黒船橋の袂の船宿、戸田屋へ向かった。腕のいい船頭の喜八が竿を手にして南北を待っていた。

二人は挨拶もそこそこに、上げ潮で水嵩が増した大横川をぬけて、大川へ出た。喜八が言葉を発しないのは、南北が狂言の筋書きを思案していると見たからだ。

しかし、今日の南北は筋書きの事よりも、この辺りで遊んだ少年の頃を思い出していた。

七歳の時、足を踏み外して藍樽に落ちた。抱き上げられ藍汁を吐き出しながら大泣きしたのを今でも覚えている。

油樽に乗せた荷舟とすれ違いながら、二人の乗った舟は、上げ潮で水嵩を増した大横川を抜けて大川に出た。

舟番所を過ぎて、豊海橋をくぐると、日本橋川に入る。途端に行き来する舟が多くなった。魚河岸から帰る木更津舟や、上総舟、江戸湾の漁師の船等、さして広くもない川は毎度の事ながら混雑している。喜八の巧みな棹さばきで船が湊橋の下を潜り抜けようとした時である。火の見櫓の下で羽を休めていた鴉が飛んできて、鋭い爪で喜八の髻を摘まんだ、船は大きく方向を変えて舳先を橋脚にぶつけた。

「アッ！」南北は額を船べりに打った弾みで、膝に抱えていた風呂敷包みを水面に落とした。大事な新作狂言の筋書き台帳である。慌てて掴もうとしたが、包みはユラユラと沈んだ。ここ数か月の南北と弟子たちの苦労が文字通り、水泡となつた……南無三宝……。目を閉じた南北の脳裏に、意地悪気に唇を歪めた三代目尾上菊五郎の傲慢な顔が浮かんだ。水しぶきが跳ねる音がして

「師匠。何とか引き上げましたぜ」喜八の声に目を開けると、長い棒の先に引っ掛けられた包みが、水音を散らしながら船の上に引き上げられた。

「……有難い」

濡れた結び目を何とか解くと、南北は震える指で筋書き台帳をめくった。水浸しになった表紙は、文字が滲んで殆んど読めないが、肝心の中身の方は周りが濡れているだけで充分に判読できる。

「助かったよ。喜八さん、よくも引き上げてくれなすった」

「お客さんがよく落とし物をするんで、知り合いの鰻屋にウナギ捌きの棒刃を貰ったんですよ。早速役に立ってようござんした」喜八はそう言うと、長い棒の先についている何本もの鋭い棒刃を見せた。其れを見て、南北は背筋を冷たいものが走るのを感じた。ほかならぬこの筋書きに出てくるお岩の亭主、民谷伊右衛門が四谷左門に振り回したのはこの鰻捌きであつたからだ。

「師匠。額から血が流れていますよ。大丈夫ですかい」

「なあに、かすり傷さ何ともない」

平気な顔で答えたが、ずきずきと痛み始めた。頭の中に血の塊でもできたようだ。「あつしも長い間船頭をしています、カラスのやつに鬚を掴まれたのは始めてですよ」思わぬ災難とはいえ、喜八は客を乗せた船を橋にぶつけたのは沽券にかわるようで、しきりに南北に謝った。そうこうしている内に船は思案橋をくぐって、親父橋脇の栈橋についた、

橋を渡って河岸道を歩くと、市村座の櫓と大屋根が見えてきた。相変わらず人の出が多い。五十年近くも狂言作者をやっている南北にとって、この辺りは庭のようなものだ。芝居小屋や茶屋で働く者は誰もが南北の顔を知っているだろう。大黒屋へ入ると、帳場にいた女将が出てきて、耳打ちした。

「菊の間で音羽屋さんがお待ちかねですよ」菊五郎は苦虫をかみつぶした顔で待っていた

「随分と待たせますね。大師匠と呼ばれるようになると、昔とは偉く付き合いが変わるんですね。南北さん」

南北が勝平蔵という名で菊五郎の養父の尾上松助と組んで当り狂言を書きだしたところからの古い付き合いだ。小伝馬町の建具屋で生まれ、目鼻立ちが奇麗だからと松助の芸養子になつて、市村座で初舞台を踏んだのは菊五郎が未だ四歳の頃だった。偉くかわいい子役だと評判になつて袖から見とれていた南北は、三十歳を過ぎていた。菊五郎と南北は親子ほども年が違ふのだ。

「どうしたんです南北さん。その顔は」

血は止まっていたが南北の右目は青黒く腫れ上がっていた。鴉と船頭の顛末を話すと、菊五郎は吐き捨てるように。

「何があろうと、舟を橋にぶつける不手際は無い。そんな船頭は船宿へ言って、さつさと首を切つちまえばいいんですよ」黙つたまま南北は風呂敷包みを差し出した。

「ずぶ濡れですね。」不機嫌そうに筋書き台帳を取り上げると、菊五郎は湿ったページを捲った

「たしか四谷のお岩稲の由来が種元でしたね。外題は何です」何度も話し合ってから先刻知っていることを菊五郎は、ねっちょい口調で聞いてきた。

「東海道四谷怪談ですよ」ページを捲り終わると、菊五郎はいきなり台帳を南北の膝の前に投げつけた。

「なんですこりや。気に入りません。陰気すぎますよ。こんなことを南北さんに言うのは釈迦に説法だが、客は夢を見たさに芝居小屋に来るんですよ。幕開きが鬼子母神裏じや暗すぎて話になりません」

座頭役者が、狂言作者の持参した筋書きを一度で気に入ることはまずないが、しかし目の前に投げつけられたことに南北は身体が震えるほどに腹が立った。

「表が仮名手本忠臣蔵で華やかな忠義の芝居だから、裏の二番目は思いつきり暗い不忠義の怪談狂言にしてくれと言ったのは音羽屋さんじゃないですか」

「そう言ったかもしれないが、こっちが思っていた以上にこの筋書きはひどすぎる」音羽屋はキセルを叩きつけて部屋をでた。